告白9

黒木昭雄
元警視庁巡査部長
警察官もマスコミ記者も
自分の生活を守るだけ。

黒木昭雄（くろきあきお）元警視庁巡査部長

１９５７年12月19日、東京都生まれ。１９７６年４月、警視庁採用。１９７７年４月、本富士署配属。１９８６年７月、第２自動車警ら隊配属。１９９５年２月、荏原署配属。１９９９年２月、退職。以後、「捜査するジャーナリスト」として活動中。著書に、『警察腐敗』（講談社）、『臨界点』（同）、『栃木リンチ殺人事件』（草思社）、『秋田連続児童殺害事件』（同）など。

警察を辞めたら、気持ちが楽になった

――１９９９年、黒木さんは23年間在職した警視庁を退職し、ジャーナリストへ転身しました。退職から現在までの10年間をどのように総括していますか。

黒木　あっという間の10年でした。退職時は小学生と中学生だった２人の子どもが、今はそれぞれ独り立ちしてくれました。子どもたちの進学や就職で、経済面も含めていろいろと大変な時期もあったんですよ。だけど、警察を退職していなければ、絶対経験できなかったようなおもしろいこともたくさんありました。警察官とジャーナリストという、まったく違う２つの仕事をしたことで、人生を２度やっているような気持ちです。

――警察官時代は、拳銃７丁、実弾71発の押収（合計）に加え、覚せい剤、大麻などの薬物摘発件数が２００件以上という華々しい検挙実績を残しました。特に覚せい剤取締法違反事件では19回もの警視総監賞を受けています。

黒木　警察官の仕事は実に様々。個々の警察官に得意分野があり、僕は薬物事犯を検挙するのが得意だったんです。そうなるまでに、僕はふつうの警察官の１００倍努力しましたけどね。何度も失敗を重ねて、職務質問のかけ方、話の進め方などから、どうやって相手の心の中にとけ込み、本当のことをしゃべらせるかを研究しました。薬物所持を疑って職務質問をかけたものの、相手が何も持っ

ていなかったこともありました。それで苦情も寄せられたし、ヤクザに土下座したこともあるんです。「S」（警察に協力するかわりに自分の犯罪を見逃してもらうスパイのこと。「協力者」ともいう）を使って誰かに薬物を持たせ、違法捜査で実績を上げていたなどと、あらぬことを噂されたりもしましたが、２００件以上も摘発させてくれる便利な「S」なんていうはずもありません。

――警察官の仕事にやりがいを感じていた黒木さんが、なぜ退職することになったのですか。

黒木　きっかけは１９９３年の慰安旅行です。当時、僕は警視庁第２自動車警ら隊に所属していました。そこに、部下との折り合いがすこぶる悪い上司がいて、同僚たちが宴会で彼に飲ませるため、ビールに下剤を入れていたのです。そんなこととは知らず、僕は彼にしつこくビールを勧めていたのですが、彼はすでに察知していて、かたくなにビールを飲もうとしなかった。彼は、ビールに下剤を仕込んだ首謀者は僕だと思っていたようです。「飲め」「飲まない」というやりとりを続けるうち、部下からの酌を受けつけない上司にだんだん腹が立ち、酒の力も手伝って手を上げてしまった。この事件で始末書処分を受けました。

しかも、事件から1年4カ月も経った１９９５年2月、「下剤ビール事件を再度詳しく調べて黒木を厳しく処分しろ」という匿名のタレコミが監察にあり、今度は戒告処分を受けたんです。僕は同じ事件で2度も処分を受けたうえに、1月

【自動車警ら隊】
都道府県警本部の地域部に置かれ、パトカーで警らを行う。警視庁には、第1自動車警ら隊（港区）、第2自動車警ら隊（豊島区）、第8方面自動車警ら隊（立川市）、第9方面自動車警ら隊（八王子市）がある。